

家庭



訓練の統一

(承前)

家庭内で訓練に統一を保って行かねばならぬ事は前號述べた通りであるが、さて次には家庭の訓練と外界の訓練とに統一がなければならぬ。

外界の訓練とこゝでいふのは、子供に對する社會の感化である。いふまでもなく、社會が子供に及ぼす所の影響、感化の力といふものは存外方のあるもので、子供を育て、行く其周圍の空氣が、不良である、其處で育つ子供はどうしても不良の

影響を受ける、どれ程家庭の内部で、皆が方針を同じくし、精神を一にして懸け方に注意しても一旦子供が外に出て交はる所の友達がよくない、其邊の人情風俗が下等だと、折角の家庭での骨折が丸つきり水泡に屬することにもなる。

何時だったか或地方で、高等二三年の女生徒を集めて話をした時分に、學校を卒業してから、何になるかと尋ねて見た所が、豈に計らんや、其中の多數の生徒が藝妓になりますと答へたのには驚かざるを得なかつた。如何にも不思議でならないで、だん／＼調べて見た所が、夫等の生徒は、皆藝妓街から通學して居るのであつた。

社會が子供の精神に與へる感化影響の甚しい一例は之でも分る、此様な空氣の中に居て、よしどれ程家庭丈けで注意した所が、果して何の甲斐が

わらうか、之に付いても今更の様に思ひ出されるのは、彼の孟母が其子の教育の爲に三たび居を遷したといふ話である。一度は其住所が商賣地であつたが爲めに我子の孟子は、商賣の眞似許りをする、之では行かぬといふので、轉居した所が今度は、紀寺の近邊と来て、其爲に孟子は葬式の眞似に心を奪はれる、之でも行かぬといふので、今度轉居した所が、學校の近邊へ行つた、すると孟子は、此度は一生懸命に學問の眞似を始めた、そこで、此處以て我子を養ふに足るといふので、遂に其處に居を定めたといふ事は、人口に膾炙して居る話である。朱に交はれば赤くなるといふのも、つまりは此邊の消息を意味するのである。

即ち、家庭の訓練と外界の訓練との統一とは、つまり、自分等が子供を養つて行く上に、反對の

影響を及ぼさない住所を定めることである。家庭の内部の中はどうか、折合がつくにしても、社會のことを自分と主義にする譯には行かぬ、だから、仕方がない、子供の教育上面白くないと思ふ場所は、此方から立ち退くより外に仕様がないのである。

夫から、子供が稍成長すると、今度は幼稚園なり學校なりへ通ふことになる、さてこうなると、又大に考を要する。同じく外界の訓練ではあるが社會の方は別に社會が考へがあつて、其子供に感化を與へるといふのではない、言はば自然の感化である而し幼稚園なり學校なりは、實際種々考へて教育を施すので、こゝに至つて、子供の教育は内(家庭)外(學校)二種の關係となるのであるから、此の關係に統一が付くと付かぬとに因つて、

教育の結果に非常な差異を生じる。

だからして、幼稚園や學校の方では、なるべく其教育の方針を家庭と一にしようといふので、いろく〜と考へを廻して居つて、其方便として例令ば懇話を開いて父兄を招待して互に教育上の意見を聞き打ち合はせたり、又は平生でも來て子供の有様を見て貰つたり其他通信簿などで家庭に向つて、子供の心身の發達の有様を知らせる様な事をして居るのである。

(擊水)

復讐心の煽動

美波ゆや子

一體に子供と申すものは、私の強いものであります。一方から申しますと、小さい時分から其我を養つて行くことは、大切な事でありまして、將

來成長の後立派な守る所のある人物となさうと思ふには、之を適當に培養して行くことにあると思ひます。

然しながら、之は餘程氣を付けませんで、たい無關と我を通して我儘にさせて行きますと、必ず我儘一偏な、人はどうでも自分さへよければよいといふ様な者になつて行きます。ですから、無理な所へ我を通してといふ事は、どうしても子供の時から抑制して行かねばなりません。

其私の強き性質から、子供と云ふものは、餘程復讐心に富んで居ります。此復讐心といふ事も、人間には適當に培養されることも必要な場合がありますませうけれど、然し一般の場合に於ては不徳の様です。自分が苛い目に遭つたから、遭はした人をも同じ目に合はせるといふので、子供の發達し